

INDEX

1 第9回FD学生の声コンクール、FD川柳受賞作品発表

第9回FD学生の声コンクール、FD川柳受賞作品が決まりましたので、ご報告します。

2 ネブラスカ大学 FD研修参加者の声から学ぶ その2

2016年3月12日(土)～3月20日(日)に、アメリカ・ネブラスカ大学オマハ校にてFD研修が行われました。研修に参加した教員から寄せられた参加による気づきを、前号に引き続き掲載しています。

先生の
言葉を
ググる
受講生

FD川柳入選作品
社会学部 3年
幾野 哲矢

1 第9回FD学生の声コンクール、FD川柳受賞作品発表

第9回FD学生の声コンクールおよびFD川柳の受賞作品が決定しましたので発表します。FD学生の声コンクールは30作品、今年度新設し、教職員からも応募が可能な部門であるFD川柳は136作品の応募がありました。たくさんのご応募をありがとうございました。授賞式は、12月24日(土)に開催いたします。



- 最優秀賞** 「未知と出会う」 文学部4年 大野沙紀
「40年後の私」 大学院理工学研究科2年 竹内泰人
- 優秀賞** 「僕と、ゾンビと、心理学」 文学部3年 山口力斗
「秋の日の出会い」 国際文化学部4年 福原知佳
- 佳作** 「大学生的共生関係のすゝめ」 文学部4年 判治有香里
「世代交代」 国際文化学部3年 土方日向
「異常気象」 現代福祉学部2年 山田早紀
- えこびょん賞** 「夢を見つける教室」 法学部3年 前垣遼
「ふりかえる。」 文学部4年 大野沙紀
「起の大学」 文学部1年 後藤里日
「山奥の海のなかで」 社会学部4年 谷本杜一
「デュルケムと愛着理論」 社会学部4年 谷本杜一
「本当の価値ある授業とは」 国際文化学部4年 武田花梨
「あだ名」 国際文化学部4年 玉井瑛理
「S205」 キャリアデザイン学部2年 酒井桃奈
「桜並木の向こう側」 大学院人文科学研究科1年 菅佐原由彦
「出会いはすぐそばに」 通信教育部文学部3年 鈴木亜也

発行：
法政大学
教育開発支援機構
FD推進センター

ホームページ
<http://www.hoseiyoiku.jp/fd/>

問い合わせ先
fd-jimu@hosei.ac.jp

「うるさいね」
私語が新たな
私語を生む

D だけど
おかしいな
何度見ても

法学部
1年
ペンネーム：皆勤賞

老眼鏡
掛けても見えぬ
このレジメ

文学部
3年
藤原 ななみ

FD川柳大賞作品

人間環境学部
4年
兼坂 美鈴

FD川柳入選作品

17作品が入選しました。
入選作品は、今号より本紙のINDEXに掲載しますので、お楽しみにしてください。

2 ネブラスカ大学 FD研修参加者の声から学ぶ その2

2016年3月12日(土)～3月20日(日)、アメリカ・ネブラスカ大学オマハ校にてグローバル教育センター主催によるFD研修が実施されました。前号にて参加した教員の声をご紹介しましたが、掲載しきれませんでしたので、今号でも引き続きご紹介します。

日本の大学とアメリカの大学とで、教え方に関して一番大きく異なる点は何だと思われましたか。

●学生の参加度

大きな違いはいくつかありますが、アメリカの教育機関全体、幼稚園から大学まで目立ってくるのは、学生の参加度です。十数年前のアメリカの大学の教え方と、今回受講したときの経験はあまり変わっていないような気がしましたが、Student Learning Outcome (SLO)のチェックがより強調されることになりました。

●行動心理学の活用

授業中、SLOのチェックとともに授業の到達に合わせるために、講師が行動心理学を応用したことに驚きました。授業終了後、この講師との話のタネになりました。授業構成、教え方、プレゼンテーションの癖などの分析はすべて心理学の原理が応用されていることが目立っていました。

日本の教育手法について、あらためて良い特徴だと思えたことを教えてください。

●先輩後輩体制

先輩 - 後輩体制です。しかし、これはすべての学生に当てはめられないものです。個人的には実験室を配属したときに、先輩に従わないといけなことがはっきりしました。主体性と個性とが紛争を起こす可能性があります。



アメリカの教育手法について、今後自身の授業に取り入れたいような気づきを教えてください。

●学生の発言を促す工夫を取り入れる

少し進度を犠牲にして、発言や質問がしやすい雰囲気を作るような時間を設けることは有効だと思います。大人数講義でも隣同士で一緒に問題を解くなどして、授業中に実際に自分で考えてなにか答えを出す練習をすることで、講義形式の授業にも主体的に参加することができるかと思いました。

●学生を授業に参加させる

日本では、授業での参加度はゼロに近い。きっと、これは、ネブラスカでの最初の講義を受けたとき、みなさんの発言だったと思います。「無理！」とよく聞こえたような気がします。個人的には、担当授業に導入しようとしているが、うまくいきません。ドイツの大学に伺ったこともありまして、やはり、日本とよく似ているケースです。アメリカでは、中学校からdebateが導入されているので、授業での参加は当たり前のことであります。さらに、授業料は安くありませんので、質疑応答は必ず講師と受講生の間で行います。

●組織的なサポート体制と個々の学生へのサポート

大学のなかに「スピーチセンター」があり、自分の望む教材ができるようにテクニカルにサポートしてもらえるところがあることや、スピーチの練習をサポートしてくれるスタッフが常駐しているところが良かったです。自分の授業でもすでにアクティブトレーニングはかなり入れているつもりですが、さらに具体的に各学生に細やかにフィードバックしてあげることができればと思いました。

●学生との講義中のやりとりの充実化

学生との講義中のやり取り、少々学生数が多いのでうまくいかない。



●学生主体の授業へのシフト

ゼミなど、少人数でできる授業ではなるべく学生に考えさせるインタラクティブな手法を取り入れるようにしました。講義形式でも、ずっとしゃべりっぱなしではなく、時々、質問を投げ掛けてみるという取り組みも行っています。手を上げて発言する学生はいませんが、目を見ると、うなずいてくれる学生も出始めています。